

## 令和3年度 病害虫発生予察 特殊報 第4号

病害虫名： チバクロバネキノコバエ *Bradysia impatiens* Johannsen

対象： プリムラ、イチゴ

### 1 病害虫情報の内容

チバクロバネキノコバエの発生及び被害を東京都多摩地域で初めて確認した。

### 2 発生経過

- (1) 令和4年1月に東京都多摩地域のプリムラで、新葉が褐変、腐敗した株を確認した(図1)。また、多摩地域の別ほ場のイチゴで、生育不良株を確認した(図3)。プリムラの新葉及びイチゴの地際部にはハエ目幼虫が寄生していた(図2、4)。幼虫を飼育したところ、クロバネキノコバエ類の成虫が羽化した(図5)。採取した成虫の同定を横浜植物防疫所に依頼した結果、チバクロバネキノコバエと判明した。
- (2) 海外では中国、東南アジア、アメリカ、ヨーロッパ、中南米、オーストラリア等で発生が報告されている。国内では、愛知県、京都府、静岡県、栃木県、三重県、岩手県、長野県、神奈川県、和歌山県、長崎県、佐賀県、香川県、茨城県、大分県、鹿児島県、福島県、秋田県の17府県で農業被害が確認され、特殊報等の発表もしくは学会で報告されている。

### 3 形態

成虫の体長は雌成虫が1.9~2.3mm、雄成虫が1.8~2.1mmで、体色は頭部が黒色、胸部と腹部が暗褐色、翅は褐色を帯びた透明である。老齢幼虫の体長は約4mmで、頭部は光沢のある黒色、胴部は白色を帯びた透明である(図6)。

従来チビクロバネキノコバエ(*B. agrestis*)及びチバクロバネキノコバエ(*B. difformis*)とされていたものは、最近の分類学的研究により、*Bradysia impatiens* Johannsen(和名:チバクロバネキノコバエ)に整理された。

### 4 生態

成虫は未熟な有機物に誘引されて産卵し、孵化した幼虫がそれらを摂食する。本種は20~25℃の環境下において約15日間で1世代を経過し、施設栽培では周年発生する。

### 5 被害

根や地際部に大量発生した幼虫が寄生して食害することにより、生育不良、新葉の褐変、地際部の腐敗等を生じる。他県ではイチゴの葉や果房の食害、株の萎凋等の事例も報告されている。

寄主範囲が広く、プリムラやイチゴの他に、スイカ、メロン、キュウリ、カボチャ、サトイモ(エ

ビイモ)、ショウガ、ネギ、花き類数種でも被害が確認されている。

## 6 防除対策

- (1) 本種の発生を確認したら、クロバネキノコバエ類もしくはチバクロバネキノコバエ（一部の農薬では「チビクロバネキノコバエ」という名称で記載）に登録のある農薬を使用する。
- (2) 被害株は速やかにほ場から除去し、適切に処分する。
- (3) 培養土は消毒された清浄なものを使用する。
- (4) 未熟な堆肥や有機物を多用すると本種の発生を助長するため、施用量に注意し、施用する場合は完熟したものを使用する。
- (5) 土壌が常に多湿だと本種の発生を助長するため、適切な水管理に努める。
- (6) ほ場周辺に植物残さが放置されていると、本種の発生源となるため、ほ場周辺の衛生管理を徹底する。



図1 新葉が褐変したプリムラ



図2 プリムラの新葉に寄生したチバクロバネキノコバエ幼虫



図3 生育不良のイチゴ



図4 イチゴの地際部に寄生したチバクロバネキノコバエ幼虫



図5 チバクロバネキノコバエ成虫  
(上：雌 下：雄)



図6 チバクロバネキノコバエ幼虫